

精神のきらめき—西洋美術を中心に—

No.	作家名	作品名	制作年	技法・材質	寸法 (H×W×Dcm)
セクション1：身体のきらめき					
1	オーギュスト・ロダン	歩く男	1878頃	ブロンズ	85.0×28.0×58.0
2	アントワーヌ・ブールデル	横たわるセレーネ	1917	ブロンズ	84.0×74.2×26.4
3	アリストテード・マイヨール	三つ編みのディナ	1940(casting 1996)	ブロンズ	34.0×22.5×41.0
4	青山熊治	《九十九里》下絵	1910頃	木炭・紙	76.2×58.6
5	小磯良平	腰掛ける女	1960	木炭・紙	62.5×48.0
セクション2：本質を形に					
6	コンスタンティン・ブランクーシ	ミューズ	1917(casting 1984)	ブロンズ	43.5×24.0×20.0
7	オシップ・ザッキン	フォルムの誕生	1947	ブロンズ	78.0×56.0×34.0
8	笠置季男	マーキュリー	1951(casting 1991)	ブロンズ	32.2×35.4×11.9
9	東村正久	翔	1976	ブロンズ	22.4×69.6×12.2
セクション3：子どものきらめき					
10	レオン・フレデリック	チョコレート売り	1887	油彩・布	82.3×56.1
11	ハンス・エルニ	若い母親	1954	リトグラフ・紙	88.5×50.0
12	ベン・シャーン	少年時代の病気を(リルケ『マルテの手記』より、一行の詩のためには…)	1968	リトグラフ・紙	57.0×45.0
13	白瀧幾之助	不詳(赤ん坊)	不詳	油彩・布	45.2×33.6
14	川口雄男	新秋の午後	1942	油彩・布	145.5×97.5
15	尾田龍	女の子	1950	油彩・布	72.7×90.9
セクション4：つましさの中に					
16	コンスタンタン・ムーニエ	坑夫たち	1890代	水彩、木炭・紙	30.4×22.8
17	パブロ・ピカソ	貧しき食事	1904(刷り 1913)	エッチング・紙	46.3×37.7
18	エミール・クラウス	フランドル地方の収穫	1904頃	油彩・布	200.0×220.0
19	コンスタン・ペルメーク	籠を持つ漁師の妻	1913	鉛筆、パステル、水彩・厚紙	88.9×70.1
20	ベン・シャーン	至福	1952	テンペラ・ボード	68.6×101.6

本展要旨

抽象彫刻の先駆者コンスタンティン・ブランクーシ(1876-1957、ルーマニア出身)は以下のような言葉を残しています。

あなたが魚を眺めるとき、あなたはそのウロコに注意はしない。そうではないでしょうか。あなたは水面下のその動き、その遊泳、その肉体のきらめきを考える…そうです。私が表現したいと思うのはこれなのです。もし私がおのヒレ、目玉、ウロコを再現するとすれば、私は動きを殺してしまい、現実のパターン、あるいはその外観を得たことにしかなりません。私がとらえたいのはその精神のきらめきなのです。

出典：エリック・シェインズ 著、中原祐介・水沢勉 訳『モダン・マスターズ・シリーズ コンスタンチン・ブランクーシ』(1991年、美術出版社)

ここでいう「精神のきらめき」とは、対象となる人やモノの見かけではなく、その内面や本質を指していると解釈できます。表現対象とじっくり向き合い、そこに潜む「精神のきらめき」をつぶさに捉えること——それこそが創作行為の根幹なのであると。

本展では、この「精神のきらめき」をキーワードとして、きらりと光る精神性が見いだせる作品を集めました。言葉の生みの親ブランクシーを筆頭に、ロダンやブールデルなど具象彫刻の巨匠、当館コレクションの特徴でもあるベルギー美術の作家に国内・郷土作家も交え、バラエティに富んだ絵画・彫刻の作品群を4つのセクションでご紹介します。

各章解説

セクション1：身体のきらめき

人間の身体は、西洋美術において絵画やデッサン、彫刻の基本テーマとなってきました。日本でも明治期以降、西洋式のアカデミックな美術教育が普及すると、技術の鍛錬としての人体描写が推奨され、美術家たちはこぞって人体と対峙し、表現するようになりました。ゴツゴツと力強い造形も、丸みを帯びた流麗な造形も、そこに生命感を宿したものこそ美しく、きらめいて見えます。

ここでは、近代を代表する国内外の画家・彫刻家がそれぞれの表現で身体の美しさを捉えた作品を紹介します。

セクション2：本質を形に

対象の動きや内面を捉え、シンプルな造形に表現することで生み出される抽象彫刻。余分な装飾をそぎ落とし、本質のみが詰め込まれたカタチは美しく強い。ブランクシーも「単純さは、その奥に複雑さを秘める」と述べているように、それが抽象彫刻の奥深さであり、魅力でもあるでしょう。

日本では戦後以降、本格的に抽象彫刻が制作されるようになりますが、その先駆的役割を果たした作家の一人が、姫路出身で二科会彫塑部に属した笠置季男です。

東西の芸術家たちが普遍的な美を表現しようと思案を重ねて創り上げた造形からは、その精神活動の軌跡を見て取ることができます。

セクション3：つましさの中に

畑や漁港、炭坑など、それぞれの場所で労働に励む人々。労働は時に辛く苦しいものですが、ここに描かれている労働者の姿からは、つましい日常を懸命に生きる力強さが伝わってきます。ピカソがその青年期、貧しい人々を主題とした作品についても、過酷な境遇のなか毅然と生きる姿に、人間の悲しさや美しさ、強さといった普遍的な要素を見出すことができます。

画家たちは、それぞれの境遇を強く生きぬく彼らに目を向けることで、その奥底にある「精神のきらめき」を表現したかっさに違いありません。

セクション4：子どものきらめき

愛らしさの中に喜怒哀楽の感情を小さな体いっぱいに発露させる子ども。その存在自体がまさにきらめいています。ここで紹介する作品には、親である画家が我が子のふとした瞬間をとらえたものも含まれますが、まるで家庭の一場面をのぞいたかのような親密な空気が漂っています。そんな子どもへ愛情あふれるまなざしを向ける親の姿もまた美しく、親子像は洋の東西を問わず美術作品に取り上げられ、時に神聖視もされてきました。

ここでは、子どもという存在を核に、きらめく精神性が見いだせる作品を集めました。

作家解説 (※リスト No.順)

オーギュスト・ロダン Auguste René RODIN (1840～1917)

パリに生まれる。プチット・エコール（後の装飾美術学校）で学び、エコール・デ・ボザールを受験するが、自然主義的作風が受け入れられず3度失敗する。彫刻家カリエ＝ベルズのアトリエで働いた後、イタリア旅行でミケランジェロの作品に強い影響を受ける。以後力強く大胆な人体彫刻を創造し続け、つねに論議を呼んだ。近代彫刻史上最大の巨匠として後に与えた影響は計り知れない。

アントワーヌ・ブールデル Emile-Antoine BOURDELLE (1861～1929)

フランスのモンターバンに生まれる。トゥールーズの美術学校に学んだ後、1884年パリに出る。この頃から生涯のテーマとなるベートルヴェンの肖像の制作を始める。1893年モンターバン市からの仕事の依頼を機縁としてロダンと知り合い、助手としてまた共同制作者として14年にわたる友情を結ぶこととなる。ロダンの影響から出発し、その後独自の建築的構成と厳格な様式で多くの記念碑彫刻にその才能を開花させた。

アリスティード・マイヨール Aristide MAILLOL (1861~1944)

フランスのパニユルス＝シュル＝メールに生まれる。最初は画家を志望し 1885 年パリのエコール・デ・ボザールに入学するが、授業に失望して退学、ナビ派のグループと交流を持つ。その後視力を害して彫刻に転じ、1905 年のサロン・ド・パリ出品作《地中海》で一般に認められるようになる。ほとんど全ての作品を女性の肉体で表現し、アルカイックなまでに明快で単純な構成に特色がある。

青山熊治 AOYAMA Kumaji (1886~1932)

朝来市に生まれる。17 歳の時洋画家高木背水の画生になる。1904 年東京美術学校西洋画科に入学。在学中、東京府主催勸業博覧会で《老坑夫》が 2 等賞を受賞。1914 年から 22 年まで欧州各地を放浪、ルノアール、セザンヌらに強い影響を受ける。帰国後、1925 年の第 7 回帝展に 500 号の大作《高原》を発表し特選、帝国美術院賞を受けた。その後も次々と大作を発表、帝展審査員もつとめている。堅実な写実をもとに数々の装飾的大画面作品を手がけた。

小磯良平 KOISO Ryohei (1903~1988)

神戸市に生まれる。実家は岸上姓だが小磯家の養子となった。1922 年東京美術学校に入学。在学中の 1926 年第 7 回帝展に出品した《T 嬢の像》が特選となる。翌年、東京美術学校を首席で卒業する。1928 年渡仏、アカデミー・ドゥ・ラ・グランド・ショミエールに通う。1936 年猪熊弦一郎、中西利雄らと反官展を標榜する新制作派協会を結成、中心として活躍した。抜群のデッサン力の上に数々の傑作を生み出した。戦後は母校で教鞭をとり、1983 年文化勲章受章。姫路市美術展の審査員も務めた。

コンスタンティン・ブランクーシ Constantin BRÂNCUȘI (1876~1957)

ルーマニアのタルグ・ジウに生まれる。クライヨヴァの美術工芸学校を卒業後、ブカレストの美術学校で彫刻を学んだ。1904 年パリに赴き、それ以後、没するまでモンパルナスのアトリエで制作、モディリアーニ、ロッソ、アポリネールはじめ当時の前衛作家たちと交流した。生涯で約 260 点の作品を生み出したが、制作にあたってはひとつのテーマを追い続け深化させる姿勢が特色である。「物事の本質に近づくと、人は自己自身に反して単純さに近づく」と語るとおり、形態を次第に単純化させ、本質をとらえたフォルムの単純化は抽象に迫るもので、現代彫刻に多大な影響を与えた。

オシップ・ザッキン Ossip ZADKINE (1890~1967)

ベラルーシのヴィテプスクに生まれる。1905 年渡英しロンドンの工芸美術学校で学んだ後、パリのエコール・デ・ボザールに入学するが半年で退学。アンデパンダン展、サロン・ドートヌヌなどに出品を続け、1921 年フランスに帰化。1923 年より二科展に出品し、翌年在外会友になる。黒人彫刻やキュビズムの影響を受け、対象を面の集合体として捉えた独自のスタイルでキュビズムの彫刻家と目される。1967 年レジオン・ドヌール勲章を受章。

笠置季男 KASAGI Sueo (1901~1967)

姫路市に生まれる。1915 年大阪に転居。1921 年未来派美術協会第 2 回展に油彩作品《作品（壺）》を出品し入選。川端画学校を経て東京美術学校に入学。1927 年《首》を出品し二科展初入選を果たす。卒業後藤川勇造の門下に入り、1936 年二科会の会員となる。戦後も一貫して二科会彫塑部の中心的存在として活動し、野外彫刻の分野ではセメントによる大作を次々と発表するなど開拓者の役割を果たした。戦前は具象的な作品を制作していたが、戦後の作風は幾何学的抽象に転じた。

東村正久 HIGASHIMURA Masahisa (1915~1987)

高砂市に生まれる。姫路師範学校を卒業。1943 年第 30 回二科展に《勤労奉仕》が初入選。1946 年より姫路市美術展に出品し、市長賞を 2 回受賞。無鑑査・招待出品、審査員として 1985 年まで運営を支えた。二科展では 1955 年特待となる。1961 年には東播磨の高御位山の山頂に《飛翔》の像を設置。1962 年二科会員に推挙される。抽象彫刻家として展覧会出品の傍ら姫路、加古川、高砂など播磨の学校を中心に多くの野外モニュメントを設置している。

レオン・フレデリック Léon FRÉDÉRIC (1856~1940)

ベルギーのブリュッセルに生まれる。ブリュッセル王立美術アカデミーに学ぶ。自然主義と共に神秘主義の影響を受け、下層階級の人々を主題とした作品を制作。グループ「レソール」や第 1 回理想主義美術展に出品。キリスト教的神秘主義と社会革命を結びつけたイデオロギーに従って制作した。児島虎次郎が彼の作品に感銘を受け、大原美術館には大作《万有は死に帰す、されど神の愛は万有をして再び蘇らしめん》が所蔵されている。

ハンス・エルニ Hans ERNI (1909~2015)

スイスのルツェルンに生まれる。1927 年からルツェルンの美術工芸学校に学ぶ。1928 年パリでアカデミー・ジュリアンのコンクールに参加、受賞する。翌年ベルリンで国立美術工芸学校に学ぶ。この頃ピカソ、ブラックらに感銘を受け、1933 年「アブストラクシオン・クレアシオン」に参加、1937 年スイスの抽象グループ「アリアンツ」の創立に参加。レアリズムから、幾何学的抽象まで多元的な技法を取り入れ、テクノロジー支配下にある人間の困窮を描いた。

ベン・シャーン Ben SHAHN (1898～1969)

リトアニアのカウナスに生まれる。1906年アメリカに移住、石版画工房で働く。ニューヨーク市立大学、ナショナル・アカデミー・オブ・デザインで学ぶ。1930年に初めての個展をニューヨークで開催し、同年から1933年にかけてドレフュス事件やその他の社会的、政治的テーマを取り上げた作品を発表し、注目された。油彩、テンペラなどのほか、リトグラフ、写真など分野を横断して活躍。第五福竜丸事件を主題とした「ラッキー・ドラゴン・シリーズ」を制作するなど、戦後もその社会的風刺精神が失われることはなく、20世紀の社会派リアリズムを代表する画家である。

白瀧幾之助 SHIRATAKI Ikunosuke (1873～1960)

朝来市に生まれる。1890年上京、生巧館画学校で山本芳翠に学んだ後、同校後継の天真道場に入門。1896年東京美術学校西洋画科3年に入学、在学中より白馬会展に出品を重ね、1900年パリ万博では出品作が褒状受賞。1904年欧米に留学、パリでラファエル・コランに学び6年後に帰国。文展、帝展、日展などに出品を続け、官展系の作家として、また外光派の一員として写実的で穏やかな色調を備えた作品を発表した。1952年には日本芸術院より恩賜賞を受けている。

川口雄男 KAWAGUCHI Isao (1908～1993)

姫路市に生まれる。姫路師範学校に入学後、飯田勇に師事する。1934年東京美術学校を首席で卒業。同年光風会展に入選。1936年文展に初入選。その後文展、大潮会展、創元会展などに度々入選。戦後も日展に入選を続け、1951年には特選および朝倉賞を受賞。1960年にはローマとパリへ留学。その間欧州、中近東を遊学。日展会員、審査員を経て1979年には大洋会を創立し代表となる。キリスト教美術を取り入れたその作品は優しく素朴である。

尾田 龍 ODA Ryu (1906～1992)

姫路市に生まれる。旧制姫路中学を卒業後上京し、川端画学校に学ぶ。1926年東京美術学校西洋画科に入学。1929年第1回国際美術協会展で国際美術協会賞を受賞。1931年卒業後、美術教師を務めながら、小説や劇作にも熱中した。1940年以来国画会展に出品を重ねる。戦後すぐのキュビズムの影響を感じさせる作風から《鉄をつくる》の連作のような激しい表現主義的な作風、晩年の重厚な風景画へと、その画風は常に変貌をとげた。

コンスタンタン・ムーニエ Constantin MEUNIER (1831～1905)

ベルギーのエテルベークに生まれる。ブリュッセル王立美術アカデミーで彫刻と絵画を学ぶが、やがて絵画に転向。1868年、ロップスらと自由美術協会を設立する。1878年の終わり頃、ワロン地方の工業地帯、鉱山などを見て回り、以降労働者の主題を手掛けるようになる。1882年、政府の派遣でスペインに滞在。1885年以降彫刻を手掛けるようになる。戦前の日本ではロダンより評価されたことでも有名な彫刻家であった。

エミール・クラウス Emile CLAUS (1849～1924)

ベルギーのシント＝エロイス＝ファイフェに生まれる。アントワープ王立芸術アカデミーに学ぶ。1889年頃から92年まで、冬ごとにパリに滞在。モネの影響を受けた。レイエ川沿いの村アステネに住み、農村の風景を題材に光に満ち溢れた作品を描き、リュミニスムと呼ばれた。ベルギーに留学した太田喜二郎や児島虎次郎が、そのアトリエを訪れて指導を受けたことでも有名である。

パブロ・ピカソ Pablo PICASSO (1881～1973)

スペインのマラガに生まれる。1895年、一家でバルセロナに移住したのち、19歳でパリを初訪問。その後の3年半の制作期間を「青の時代」といい、パリに定住する1904年からは「バラ色の時代」と呼ぶ。1906年ゴッソル滞在を契機にブラックと共にキュビズムを探究、第一次世界大戦後のイタリア訪問後には「新古典主義の時代」を迎えるなど、画業の中で様々な様式を展開した作家である。多くの詩人、画家、デザイナーと交流し、絵画に限らず版画、彫刻、陶芸、舞台装飾、ポスター、挿絵など分野を横断して作品を制作。その数は生涯数万点のぼり、影響は多方面にわたる20世紀芸術を代表する巨匠の一人である。

コンスタン・ペルメーク Constant PERMEKE (1886～1952)

ベルギーのアントワープに生まれる。6歳の頃オステンドに移る。1903年からブリューージュの、1906年からゲントの美術アカデミーで学ぶ。1909年シント＝マルテンス＝ラーテムを訪れる。1912年再びオステンドに戻り、スピリアールトの隣の地に住む。1914年に大戦に応召、19年にオステンドに戻る。29年ヤベークに移住。くすんだ色彩で強くデフォルメされた人物像を描く。猟師や農民の労働する姿を好んで描いた。